Library News 6 月号

発行：真高図書館　平成 22 年 6 月 18 日

Library News は真高ホームページでカラー版が閲覧できます→　http://web2.tochigi-edu.ed.jp/moka/nc2/

W杯開幕!　日本の初戦はカメルーンに　１ －０ で勝利!

図書館ではサッカー選手の本やサッカーをテーマにした小説を特設展示しています。

～特集本の一部を紹介～

『ぼくたちの砦』（エリザベス・レアード　作）

イスラエル占領下のパレスチナで、過酷な状況を生き抜きながらもサッカーの世界チャンピオンを目指す少年たちの姿を描いた作品。

『Keeper　キーパー』（マル・ピート　作）

「ついー昨日、八万の観衆と、世界二億二千万のテレビ視聴者の前でワールドカップをつかみとった男」。その史上最強のゴールキーパーがインタビューアーに語り始めた話には万人の想像を超える秘密が隠されていた…。

第３回真高読書会報告（６月２日開催）☞

有志を募って始まった校内読書会も３回目を迎えました。今回の参加者は１年生から３年生まで合わせて１３名。テキストに『桜の満開の木の下で』（坂口安吾）、サブテキストには『桜の樹の下には』（梶井基次郎）を用いて個々の意見を交わしました。

第3 回校内読書会に参加された先生方のコメント

みな楽しそうに自分たちの意見を述べていた。深い読みの意見もあり、他人の考えを知り勉強になったと思う。あらかじめ参加者に配布されていたアンケートのフェチズムについての意見が反映されていたように感じた。更に特化させたいのなら谷崎潤一郎や川端康成（の作品の一部）を薦める。（国語科　豊田先生）

「朋有り遠方より来る、亦楽しからずや　読書会」

「読書は大切だ」とか「読書すると国語力がつく」という言葉をよく聞く。諸君も聞いたことがあると思う。これらの言葉が本当かどうかは私にはよくわからない。

そして残念ながら真高生の読書量は少ない。ほとんど教科書や参考書以外の本を読まない生徒も多い。だから読んだ本の内容について、友人と熱心に語り合うようなことも本校であまり見たことがない。もしかすると私が知らない所でマンガやアニメの中味について激論を交わしているのかもしれないが…

今回読書会に参加するにあたり坂口安吾「桜の森の満開の下」と梶井基次郎「桜の木の下には」を読んだ。桜の花見の時に感じていた「言葉にできない感覚」をこの小説家たちはこんな言葉に紡いだのかと思った。私の感じた「言葉にできない感覚」と坂口や梶井の感じたそれはもちろん同じ感覚ではない。しかし彼らが書き残したものと私が感じていた「言葉にできない感覚」には類似点も多いように思う。それを私の言葉で表現したとき、その言葉を聞いてくれる友がいて、また別の言葉でこのことについて彼が語ってくれるとき、私は楽しさを感じる。

さて今回の読書会には1 年生から3 年生までが幅広く参加していた。これまで会話したことがない仲の生徒もいたと思う。しかし本の内容について一人一人が「自分の言葉」で発言していたことに好感が持てた。どう読むかの前にどう感じるかがあり、それを本文をたよりに「自分の言葉」に置き換えていくことは大切なことである。そして自分は考えもしなかった「他人の読み」に出会うことは衝撃であり楽しみでもある。この経験を繰り返すことで自分の幅を広げ、成長させることができるのだ。私が今回の読書会でもっとも感じたのはこのことだ。

「論語」の初っ端にある「子曰、学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。」の「有朋自遠方来」には「遠くからやって来る同志」の他に「考えが遠く隔たった者」という意味もあるらしい。自分が感じたことと違う感じ方をする友人とそのことについて語り合うことは「マッコト楽しからずや」なのである。友とマジメに語り合うそんな真高生であってほしい。（国語科　塚越先生）